View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

長野県立大学リポジトリ
THE UNIVERSITY OF NAGANO REPOSITORY
信州共同リポジトリ
REPOSITORY OF SHINSHU

幼児の発達と言語表現活動 ： 幼児の「つぶやき」の観察（上）

著者	小林 洋文，山崎 ひと美
雑誌名	長野県短期大学紀要
巻	50
ページ	175-188
発行年	1995-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1118/00000508/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

長野県短期大学紀要　第50号　175-188頁　1995年12月
Journal of Nagano Prefectural College, No. 50, pp. 175-188, December 1995

幼児の発達と言語表現活動
――幼児の「つぶやき」の観察（上）――

小林洋文*・山崎ひと美**

Ⅰ．研究の目的と方法

［研究の目的］　本研究は，方法論としての「臨床幼児教育学」研究の試みの一環である。臨床医学が「患者の治療を目的とする医学」であり，臨床医が「患者に接して診断・治療を行う医師」であり，そもそも臨床とは「病床に臨んで実地に患者の診療にあたること」（『大辞林』三省堂）であるように，幼児教育学もまた幼稚園・保育園（場合によっては家庭）の現場に積極的に臨んで実地に子どもや保育者（親）に接し，あるいは実践記録を分析しながら，それらの経験知を集約して子どもの発達と教育の研究を進めなければ，その有効性が問われるであろう。

そこで今後しばらく，現場経験者の手になる，埋もれたままになっていると思われる保育実践の記録を，現場経験者の協力を得ながら収集・整理する作業を継続していきたい。本研究は，９年間幼稚園教諭として現場で幼児教育に携わってきた山崎ひと美（本年３月退職）と始めた共同研究の第一報である。

子どもの表現活動には，身体的表現（ダンスなど）・造形的表現（絵画，製作など）・音楽的表現（歌う，楽器演奏など）・言語による表現（話す，書くなど）など多様な表現形態がある。本研究の目的は，人間の諸能力の発達におけるそうした子ども自身による「表現活動」の役割に改めて注目し，その意義について考察を深めることにある。今回はとりわけ「言語表現」能力の発達段階に注目して，山崎が採取して月別に整理した３歳児（年少児）・４歳児（年中児）・５歳児（年長児）の「つぶやき」の観察記録を順に追って，いかにも子どもらしい「つぶやき」の自在な変化を具体的に明かにする。そして，子どもの表現の変化の奥に潜む子どもの心理と生活を推察しながら，幼児教育のありかたについても考えてみる。

最後に，子どもの言語能力の発達と表現形式，認識能力と言語表現活動の内的関連などについて先行研究を改めて洗い直し，今後の研究課題を理論的に明かにする。

［研究方法］　1986（昭和61）年４月から1995（平成７）年３月まで長野県下の幼稚園教諭として保育実践に携わった山崎が，在職中に残した数々の実践記録の中から，幼児の「つぶやき」として採集・記録したものを，幼児の表現の面白さ，多様さ，家庭環境による違い，年齢による変化，言語表現能力の発達との関連，などを意識しつつ，共同で考察する。

山崎は，1984年４月長野県短期大学幼児教育学

*〒380　長野市三輪8-49-7　長野県短期大学

*こばやし・ひろふみ　〒380　長野市三輪8-49-7
長野県短期大学幼児教育学科
**やまざき・ひとみ　〒381　長野市上野3-260
1986(昭和61)年３月長野県短期大学幼児教育学科卒業，旧姓那須

科に入学し，1986年３月卒業，同年４月から1991年３月まで学校法人信州学園・長野北幼稚園（長野市）に勤務して，年中・年長・年少・年中・年長組を担任した。次いで同・安茂里幼稚園（長野市）で３年間，同・さゆり幼稚園（戸倉町）で１年間，それぞれ主任教諭として幼稚園の管理・運営にも参加した経験をもつ。９年間という在職年数は平均４～５年のこの社会では比較的長いほうで，いわゆるベテランの部類に属する。９年間の幼児教育に関する記録や資料は厖大なものになる。今回使用する資料はその一部である。

この先の理論的考察は，何度も話し合いを重ねたうえで小林が草稿を執筆して，それを又二人で検討するという手順を踏んで行くであろう。

II．３～５歳児の「つぶやき」の観察記録

はじめに

「三つ子の魂百までも」と言われるだけに，そこに働く保育者の責任は重い。しかし，子どもの魅力は尽きることなく，保育者の「苦労」を「生き甲斐」に変えるほどの力をもっている。

「幼児の園」である幼稚園，そこにおける子どもたちの魅力の一つに幼児の言語表現があげられる。実際，子どもと一緒にいると，面白い言葉の使い方をしたり，思いもよらないことを言い出したり，短い言葉でその時の自分の気持ちをずばり表現したり，科学的であったり，さらには哲学的だとすら感じることもある。

子どもは，言葉ですべてのことを表現できるわけではない。笑う，泣く，すねる，はしゃぐ，時には暴力的に振る舞うこともある。頭の先から顔の表情，仕草，行動そして足の先に至るまで，子どもの存在そのものが外に向かって何かを表現していると言ってもよい。

しかし，身体的表現，造形的表現，音楽的表現，その他さまざまの幼児の表現活動の中から，今回は特に「言葉による表現」に注目して，３歳児（年少）の４月の入園から５歳児（年長）の３月の卒園まで，私（山崎）が幼稚園の現場で実際耳にしたつぶやきの採集記録の中から，月毎に一例ずつピックアップして順を追って考察を試みた。本研究を通して，言語表現活動の背後にある子どもの置かれている環境も含めて，子どもの成長・発達について理解を深めたい。

■３歳児の「つぶやき」

４月

《お迎えの時，友だちの弟（赤ちゃん）を見て，

Ｙ男「僕のうちにも同じのあるよ。明日持ってくるね。」》

入園当初，幼稚園は戦争である。保育者は両腕に泣く子どもを抱き抱え，服の裾にすがりつく子どもに合わせて歩き，手の届かない子どもには声をかける。お迎えの保護者の姿が見えた時は，子どもにとっても保護者にとっても緊張の解ける時である。

Ｙ男にとって，赤ちゃんを抱いているお母さんの姿は日常的なものなのだろう。たまたま今日は，自分のお母さんが弟を抱いて来なかったために，このように保育者に知らせてくれたのである。「あるよ」「持ってくる」とは，物のようだが，まだ小さな弟を自分と同じ人間とは認識できていない表れである。はたして自分の存在を「生き物」と捉えているのかどうかさえも，まだ定かではない。

次の日，約束どおり，彼の母親は弟を抱いて来た。「持って来たよ」と言うＹ男の横で，母親が「“連れて来た”でしょ」と言ったが，その言葉は本人の耳には入らなかったようだ。昨日見たモノと同じモノを保育者に見せることができた嬉しさでニコニコしているだけだった。

５月

《４，５人で言葉遊びをしている時のこと

先生「今度は難しいよ。『る』のつくものなー

んだ？」

K男「るーれい（幽霊）。」

T子「それは『ゆ』だよねぇ。」

先生「今度は簡単かな？『し』のつくもの，なーんだ？」

T子「しままま（しまうま）。」》

これは，テラスでお迎えを待つ帰りのひとときの一コマである。「ゆ」と「る」，確かに区別がつきにくい。幼児期に発音の混同はよく見られる。言葉を正確に聞き取る力も不十分であり，初めから正しい発音ができるわけではない。言葉の獲得も「模倣」から始まる。2歳になる頃300語，その6カ月後1,000語，5歳頃には2,000語が使えるようになるというのだから，言語面のこの数字を見るだけでも子どもの発達はすごい。その中に，言葉の混乱が見られるのは当然であろう。

私は4歳頃まで「テレビ」を「テビレ」と言い，「おさかな」を「おさなか」と言っていたようだ。また，ある時私の弟に「近かったね」と同意を求めたことがあったが，その時3歳だった弟は「近くくなかった。遠くくったよ」と答えたという。このような事例は，誰にも1つや2つは思い浮かぶ。

字を書くようになる5歳の後半，区別のつきにくい語を間違えて覚えてそのまましゃべっている子は，書き言葉でも間違えて書いているケースが多い。例えば，「～してください」を「～くらさい」と書いた子がいた。この子はこう覚えてしまっていたのだと，その時初めて知るようなこともある。子どもが自発的にしゃべっていることを無理に訂正する必要はないとしても，保育者や保護者は発音の間違いに気づいたら，正しい言葉で話しかけることが大切だと思う。また，書くことによって，その子がその言葉をどう認識しているかがはっきりする。3歳の時点では，書くことより聞いたり話したりする経験の積み重ねが大切だが，話し言葉はいずれ書き言葉につながり，言語は認識活動に重要な役割を果たしていることを，この事例から考えさせられる。

6月

《先生「T男君　その長靴，素敵だね。」

T男「おにいちゃんのが小さくなったからもらったの。この靴，大きくなったら先生にあげるね。」》

T男は真顔でそう言った。普段いたずらをしたり，友だちに手を出したりする子だが，こんなやさしい気持ちを持っているのだと知った，感激の時だった。後になって，「靴って大きくなるの？」と聞き直してみようかとも思ったが，それは彼に対して意地悪な気がしてできなかった。

7月

《夕食の時，たけのこ汁を出しました。すると，

K男は「あれ？　このたけのこの中にかぐや姫入っていないね。お母さん，小さく切っちゃだめだよ。」

と，真剣にかぐや姫を探していました。（母親からの連絡帳より）》

このK男の表情を想像するだけでも微笑ましくなる。あわせて，かぐや姫の物語が彼の中にイメージとしてインプットされていることが分かり，嬉しくなる。そして物語の中の「たけのこ」と現実の「たけのこ」が同じものだと認識していることも分かる。この日，彼の一家は，たけのこ汁を気をつけてゆっくり食べたのではないだろうか。子どものかわいい言葉は，大人の心を温かくする。

8月

《午後から夕立。窓際で大きな声で，

S男「カミナリさんはどこにいるの？　どこからくるの？　バナナあげるからおいで！」》

物語に登場したりするキャラクターとして，子どもにはカミナリや鬼は「怖い人」というイメージがある。でも，彼は会ってみたかったのだろう。自分の好きなバナナを引き合いに出している。窓から落ちそうなほど乗り出して，カミナリの音が

大きければ大きいほど，大声で叫ぶ。そのうち，元気のいい男の子が寄ってきて一緒になって大合唱。冷めた大人にこのような遊びはできない。保育者も「男の子」になれる楽しいひとときである。

9月

《大好きなおばあちゃんに向かって，

A男「おばあちゃんは，大きくなったら何になりたい？　僕はね，大きくなったらアメリカへ行って大きなちょうちょを捕まえるんだ。おばあちゃんも連れてってあげるね。行くときは飛行機で，帰りはバスだよ。」》

幼稚園にはたいてい9月頃，祖父母参観日がある。親とはまた違ったやさしい目を向けてくれる人に対して心を開き，「一緒に」いたいと思ったり，何かしたいと思うものである。年齢が50も違う祖母を自分と対等に考えている。そして，何かしてあげたいと思っていることが伺える。3歳の子なりのやさしい言葉に，おばあちゃんは目頭を熱くしていたように見えた。

小さい頃は，母親の絶対的な愛情が大切だとされる。愛されることを知っている子は情緒が安定し，他人を信頼し，愛することのできる人になるのだと思う。自分を愛してくれている人が，母，父，祖父母…と広がって行き，やがて自分の愛情を他人に与えることのできる人になっていくのである。

10月

《参観日。風疹が流行し，欠席者が多い。

先生「S子ちゃんも風疹でお休みです。」

M男「…先生も風疹なの？」

先生「これはね，ニキビっていうものなの。」

（保護者，大爆笑）》

これは，保護者の前で，私が真っ赤になり苦笑した時のものである。M男も風疹にかかり，その症状を体験したばかりだったこともあり，非常にタイムリーな話題だった。参観日と重なってしまったのは，私の不運としか言いようがない。ちっとも悪気はなく，観察力の鋭い彼であった。

11月

《先生「この紙芝居怖そうだな。みんな大丈夫かな？」

H男「僕は男の子だから平気だよ。」

S子「私，女の子だけど大丈夫。」

M子「私，まだ男の子だから平気。早くやってよ！」》

「男」「女」という区別あるいは自覚は，いつ頃から，どのようにして起こるのだろうか。3歳児でも「男は強い」というイメージがあるらしいことが伺える。このM子の言葉から，「早く紙芝居をやってほしい」という切実な気持ちが伝わって来る。彼女は姉と二人姉妹で，家庭でも「女だから」という育てられ方を特にはされていない。育てられていく中で，子どもたちは「男らしさ」「女らしさ」のイメージを作らされていくのだろうが，彼女の言葉を聞きながら，「男」「女」というよりも「自分らしさ」を大事にしていってほしいと思った。せめて幼稚園のうちくらいは男女の区別なく遊んだり生活してほしいものである。

この3年後に転勤先の違う幼稚園で理解ある園長と巡り会い，園長の男女平等の方針から出された，これまでの男女別名簿を男女混合名簿に切り替えようという提案に私はすぐに賛成した。そう提案されるまでは，自分の中にも知らず知らずのうちに「男女別」で当たり前に思っていた部分があった。そのことに改めて気づかされた時だった。

12月

《お迎えに来たお母さんの顔を見るなり，興奮しながら，

I男「今日，幼稚園にサンタさんが来たよ。握手したんだ。大きくて，あったかーい手だったよ。『メリー・クリスマス』って言ってたんだよ。」》

3歳の頃など，サンタクロースの存在を疑う余地などないらしい。憧れの人に会った瞬間，子ど

もの目は幸福そうに輝いている。子どもにとってサンタクロースは，目に見えなくても実在するものなのだ。

宗教家でもないのにこの時期だけキリスト教にかぶれるのはなんたることだと言う人もいる。しかし，クリスマスは，1年の中で楽しい夢が見られる最大のイベントではないかと思う。「サンタクロース＝プレゼントを持って来てくれる人」と大人は考え，子どももそう思っていると思うから，大人には厄介な行事かもしれない。

幼稚園ではこの機会をよい機会と捉え，保育計画が組まれる。サンタクロースやクリスマスに関する物語に触れ，歌を歌う。保育室内の飾り付けも工夫して作る。プレゼントが目的ではなく，昔，世界中の人を幸せにしたいと思った人がいたこと・自分の物や気持ちを人に分けようとすることは気持ちのいいことであり，それが「やさしい」ということなのだということ・「夢を信じる」ことはやがて自分の信念を大切にできることにつながる等々のことを思い浮かべながら，私は保育を構成したものである。

4月からの園生活もずいぶん落ち着き，クラスとしてもまとまるこの頃には，園によっては，劇や合奏などの発表会が催される所も多い。

1月

《給食時，急に泣き出し，

K男「今日は僕，お母さんに悲しんでもらう…。」》

急な出来事に私自身驚き，K男の言葉の意味を理解するのにずいぶん時間がかかってしまった。今までに，彼が昼食時に泣いたことなどなかったからである。何がいつもと違うのかな？　そうか！弁当が食べ切れないからなんだと，ほんの少し残っていたご飯から分かった。それにしても，「お母さんに悲しんでもらう」とは面白い言い回しだなと感心しながら，「今日はもう無理をしないで残そう」と声をかけた。彼はひとまず落ち着いて昼食を終えた。

彼のその言葉の言い回しの原因が私にあったことに気づいたのは，別の子と話していた時だった。彼とは反対に，いつも残しがちな女の子が「全部食べたよ！」と報告に来た時，私は「今日，お母さんがお弁当箱を洗おうと思って開けたら，きっとすごく喜ぶよ。お母さんに喜んでもらえるね！」と，他の子にもよく言う言葉で褒めたことがあったのである。それで自分で自分の言葉にはっとした。K男の言葉は，実は保育者の私の言葉の裏返しだったわけである。

2月

《(家で) テレビの前に立って足を上げている。

母親「どうしたの？　何やってるの？」

Y子「テレビの中に入りたいの。テレビに映りたいんだもん。」》

こういうつぶやきは，Y子に限ったことではない。テレビに入ってみたいと思う気持ちは，子どもなら誰でも一度は持ったことがあるのではないだろうか。

大きなダンボールを子どもたちの前に置いてやると，非常に喜ぶ。家になったり，バスになったり，テレビになったり…。ごっこ遊びにダンボールが1つあると，遊びの幅が広がる。

では，大人だからテレビのメカニズムをよく知っているかといえば，子どもが満足するような答えが案外浮かんでこない。子どもと一緒になって，「テレビに映りたいね」と同意するくらいである。この頃はホーム・ビデオもずいぶん普及し，自分がテレビに映ることも可能になった。今後は，Y子のようなつぶやきは減っていくのだろうか。

私が幼稚園に勤務したこの10年間（1986-1995年）に，機械のお陰で生活が非常に便利になった。その一方で，人と言葉でコミュニケーションをとる必要がだんだん少なくなってきているように思う。この実感は，子どもの〝ごっこ遊び〟（特にお店屋さんごっこ，おうちごっこ）を見ていて，

そこから得たものである。初めて私が子どもとお店屋さんごっこをした10年前からしばらくは，「八百屋さん」「洋服屋さん」「電気屋さん」などの区別があった。牛乳キャップでお金を作り，

「みかん１つください。」

「はい，５円です。」

という言葉のやりとりをした。お母さん役の子は，包丁で玉ねぎを刻み，ひき肉と合わせてお団子にし，フライパンでハンバーグの御馳走を作ってくれた。それが５年ほど経った頃から，みかんはパック入りが登場し，かごやレジスターが出てきてスーパーマーケット方式に様変わりした。お店屋さんごっこをするのに「レジ」を作り始めたのには驚いた。そして10年後の今では，レジでは「ピッ」という音とともにバーコードで会計処理がされる。さらにお財布の中にはキャッシュカードも入っている。お母さん役の子が「チン！」という音とともに電子レンジでグラタンの御馳走を作ってくれた。

言葉のやりとり，人との関わりがふんだんに盛り込まれたお店屋さんごっこを私は大切に考えてきたつもりだが，保育者の既成概念（イメージ）と現在の社会しか知らない子どもたちの持つイメージとの間に「ずれ」が生じ，年々大きくなっていく。今の子どもたちの遊び全体が，単発的で短く感じられるのは，社会全体の効率化，合理化，能率主義と深い関係があるのではないだろうか。

３月

《桜もちを食べて，

H子「初めて食べたんだ。とってもおいしくて，ほっぺたが赤くなっちゃった。」》

少ない語彙にもかかわらず，初めての経験を豊かな表情と併せて言葉で表現している。絵や言葉を「こう描くんだよ」「こう話すんだよ」と方法を直接指導しても，その子の本当の表現になるとは思えない。楽しかったこと，感動したこと，自分で発見したことなど，自分で具体的に経験できたことが豊かに積み重ねられてこそ，子どもたちは自分の言葉や絵で表現したいと思う意欲が出てくる。そういう考えを大切にして私は指導してきた。いろいろな体験を実際にどのくらいたくさんさせてあげられるか。そのために，どれだけ環境条件を整えてあげられるか。――このことが，保育者に求められる資質の重要な一部分であるように思う。

３歳児の「つぶやき」の考察

覚えたばかりの言葉であるから，シンプルで，使い方に間違いも多いけれども，３歳児は新鮮な感覚で，〈自分の〉言葉で表現しようとする。まだ事象の因果関係が分かっていないし，言葉の表現方法の形式も整っていないが，どれもこれも実に魅力的で面白い。６月の事例のように「靴が大きく」なったり，９月の事例のように「アメリカから帰って来るときはバス」だったり，11月の事例のように「私はまだ男の子」だったりして，子どもの思考は広く，まるで無限の可能性をもっているような気がする。大きくなるにつれて言葉も知識も増えるけれど，ある意味では型や枠にはまって，柔軟な思考がだんだん失われていくことも事実である。

体も心も大きく成長していく３歳児。初めての社会・集団である幼稚園，家庭とは違う雰囲気，両親とは違う大人達，いずれ友だちになる自分と似ているようで違う大勢の人々。３歳児にとって，最初は戸惑いの連続だろう。周囲の環境に慣れるまでの個人差はかなりあるが，落ち着いて回りを見渡せば，保育者は自分を受け入れてくれるし，友だちといることも面白いことだと分かって来る。周囲は家庭とは違った魅力で満ち溢れていることを発見するのだ！

言葉の獲得により，自分の思ったことを語り，質問し，他人の言葉を聞き取り，考える。この繰り返しによって言葉はどんどん増え，心も発達し

ていく。こうして3歳児は，それぞれその子らしい言葉で表現活動を旺盛に展開し始める。

■4歳児の「つぶやき」

4月

《S子「毛深い人はやさしいってお母さんが言ってたよ。私はね，毛深くないけど，やさしいよね。」》

「毛深い人はやさしい」と確かに昔から言われる。それは，毛深い人は温かみが感じられるからか，見た目の悪さから判断してはいけないということからだろうか。理由は定かではないが，この言葉に救われる女性は多い。お母さんは，S子の姉が毛深いことを気にしていたから言ったことらしいが，隣で聞いていたS子には，若干ショックだったようだ。彼女には既に「やさしいことは良いこと」という気持ちが育っていることが，この言葉から伺える。

5月

《母の日を前にして，お母さんについて話し合う中で，

Y子「…私はお母さん，嫌い。だって怒ってばかりなんだもん…。」》

Y子は4歳（4月）からの入園である。毎朝，園の門前でぐずり，母親に突き放されて，置いていかれる。朝，園に連れて来てどんな別れ方をするかで，母親のその子への接し方や親子関係が分かることが多い。「幼稚園に行きたくない」と言われると切ないのはよくわかるが，保育室の前で一緒になって今にも泣き出しそうにしていたり，なんとか原因を引き出そうと根掘り葉掘り嫌なことを聞き出そうとする親もいる。

保育者としては，有無を言わせず保育者に預けて去って行ってくれる方が有り難いし，案外子どもも少しすれば気がおさまり，泣き止むのも早い。これで家に帰って十分スキンシップをとり，親が落ち着いて接してくれさえすれば，園に溶け込むのも早い。

しかしこのY子の場合は，有無を言わせず預けて行ってくれるのは有り難いが，幼稚園は行かせるのが当たり前という親の態度が感じられ，Y子の心の奥の「甘えたい気持ち」はほとんど満たしてもらえていないようだった。家庭訪問に行っても父親と祖父母が同席していて，専ら父親と保育者の会話が中心であった。Y子の母親に対するこの言葉を聞いた時，いつもむっとしたような表情でY子を置いていく母親の顔が浮かんできた。

この母親だってY子を愛していたに違いない。時々Y子のよい出来事をお話しすると，笑顔を見せてくれた。元々この母親が冷たいわけではなく，家で母親の置かれている立場こそがこの母親とY子を作っているのだと分かったのは3年後，Y子の弟を受け持って再び家庭訪問をした時のことだった。父親が「Y子に対しては，女の子で第一子であったこともあり，かなり厳しく育てました。弟のM男は男の子ですから，あまり小さなことにこだわらず，たくましく育てたいと思っています」と話してくれた。

姉と同じようにM男も登園を渋ったことがあった。泣くM男の前にしゃがんで，涙を拭きながら笑顔で話しかけているその母親が，同じ人とは思えないくらいだった。

6月

《窓に雨があたるのを見て，

N男「窓にひびができちゃったぞ。…あー，今度は窓が汗びっしょりになったよ。」》

雨の日はとかく憂鬱なのは，大人の感覚なのだろう。子どもにとっては雨もまた楽しいのである。「神様のおしっこだぞ」とか，「お空が泣いているよ」などという詩的な言葉も多く聞かれる。人間が生活していく上で「水」はなくてはならないものだが，子どもにとっても「水」は，「水」という言葉の範囲におさまらない非常に広い意味をもっている。

7月

《七夕の笹に短冊をしばりつけながら，

K子「おみくじみたいだね。何か良いこと，あるかな？」》

木の枝におみくじをくくりつけることと笹に七夕の飾りを付けることは確かに似ている。半年前のお正月に，K子はおみくじを引いたのだろう。4歳のこの頃になると，自分が経験したことと似ていることを結び付けられるようになっていることが分かる（K子は，正確に言うとこの時既に5歳になっていたが）。

また，七夕の短冊に書かれた願い事を見てみると，個人差はあるが，3歳の頃は「メロンが食べたい」「おもちゃが欲しい」など具体的で身近なことからの願い事が多く，4歳では「ロケットに乗りたい」「セーラームーン（アニメの人気キャラクター）になりたい」など夢の世界も広がり，5歳になると「お泊まり保育の日，晴れますように」「幼稚園の先生になれますように」など，現実的な願い事もするようになる。

七夕など毎年巡って来る行事を通して，毎年同じ作業をすることがある。例えば，色紙で作る「輪つなぎ」などがその一例である。3年間見ていると，このような時にも子どもの学習能力の高さ，成長の速さを感じる。3歳児の7月の時点では1つの輪を作るのもままならない。のりの使い方もひどいものである。ましてや，つなげることを理解させることなど容易ではない。子どもと一緒に作りながら，つなげるのは保育者の作業になる。しかし5歳ともなれば，友だちと長さを競ったり，友だちの物とつなげるともっと長くなることを知って喜び，自然に共同作業が始まるようになる。保育者は色紙の提供者という脇役に徹することになる。

幼稚園中に飾られた笹飾りを見ながら，子どもの願い事について保育者同士で話し合ってみると，また新しい発見があり，子どもに対する思いが深くなったりすることもある。

8月

《モコモコしている雲を見上げながら，

R男「おもしろい雲がたくさんあるね。あー，あの雲，ポップコーンだ！」》

真夏，青空には入道雲。まさにポップコーンである。「雨」について先に少し触れたが，雲もやはり自然の魅力的な創造物である。人間が作為的には作り出せない自然の美しさの前では，大人も子どももない気がする。遊びの手を少し休めて，空想の世界に浸る。

この後で，他の雲を見て他の子が「魚だ」「あれはアイスクリームだ」などと言い出し，はては「あの魚，ポップコーンもアイスクリームも食べちゃうんじゃない？」と，お話し作りにまで発展する。

9月

《かけっこの時，走った後で，

J男「僕の靴，火がついたみたいだよ。あついなあ。やけどしそうだよ。」》

J男がどれほど一生懸命走ったかが分かる言葉である。

10月

《先生「あっ，キンモクセイのいいにおいがするよ！」

S子「ちょっとだけね。先生の鼻の穴，大き過ぎるんじゃないの？」》

秋の少しひんやりとした天気の良い日，園外へお散歩に出た。実りの秋はこれまた発見の連続である。青空，ススキ，リンゴ，柿，トンボ等々。たまたまキンモクセイの匂いが漂ってきた。この匂いに思い出のある私は，どんな顔でこう言ったのだろう。S子の言葉から想像できるような気がする。目に見えるものについては話題にし易いが，「匂い」とか「感触」，「虫の声」など，なんとなく感じるものについては素通りしがちである。子どもたちと一緒に生活するなかで子どもの感性を

磨きたいと思うなら，保育者自身が感性を磨かなければならないだろう。そして，感じたことを言葉にして伝え合うことで，感性も豊かな表現力も育っていくのではなかろうか。

11月

《大きなダンボールを皆で青く塗っている時，

T男「きれいな空みたいだな。よーし，もっともっと広い空にしちゃおうぜ！」》

4歳の秋が深まる頃は，落ち着いて行動できるし，友だちとの関係も充実して集団遊びを喜ぶようになってくる。友だちと協力して製作するのにとても良い時期だと思う。「作品展」もこの頃催す園が多い。

この日は，皆が乗れるロケットを作ってみようということになり，数人の子がダンボーをル一面青く塗り始めた。T男がこの言葉を発した背景には，大きなダンボールや大量の絵の具などの環境条件，T男の想像力，そして友だちと協力することで自分一人だけの時以上の力を出して活動できたこと等があげられる。大胆な行動ができたことで，心も今まで以上に開放されたされたのだろう。子ども自身が自分から意欲的に活動している姿は，まさに輝いている。

12月

《先生「D男君，お着替えがんばれ！」

D男「うん。でも，だめだよ。このズボン脱げないぞ。ボンドでひっついているみたいだよ。」》

わりといつも着替えの遅いD男である。さっさと着替えて早く遊ばせたいと思うが，なかなか進まない。ましてや冬になると厚着になるので余計時間がかかる。そうかといって着替えをする意志が本人にあるようだし，遅いが自分でできるのだから，保育者としては言葉で励まして見守るしかない。

この朝は，私の気持ちの中に「お母さん，もうちょっと着替えやすい物を着させてよ！」といういささか非難めいた感情とD男を急かす気持ちがあった。私は，D男のこのユーモア溢れる返答で出端をくじかれ，思わず吹き出してしまった。

この日の保育が終わった帰り際に，ふと今朝の出来事を思い出した。ひょっとしたらD男は，私の急かす気持ちを感じて咄嗟の言い訳ではぐらかしたのではなかったのか…。そこまで意図的ではなかったかもしれないが，あの時私の気持ちが穏やかでなかったことを改めて反省させられたのである。

1月

《昼食時，ナプキンを使わずにハンカチを使っているので，

先生「ナプキンないの？」

Y男「あるけど，…休ませてあげるの。いつも使っているから。」》

前述の4歳児のY男のつぶやきとよく似ているようだ。4歳児もこの頃になると「言い訳」がとても上手になってくる。「自分がそうしてみたかったから」と素直な言い方をしない。「お母さんがそう言ったから」とか「箸が落っこちた」とか「牛乳瓶が倒れた」などと，原因を自分が請け負うより他人のせいにしたり，単なる自然現象ででもあったかのように説明して言い逃れることがよくある。理にかなった科学的な説明ができるようになるのはもう少し先になる。

2月

《先生「R子ちゃんは，弟のT男君と仲良しだね。」

R子「うん。でも私が風邪をひいても，T男君はひかない時もあるんだよ。」》

何でも同じだということは，仲良しであるということの証拠のようなものなのである。R子は弟が大好きで，とても可愛がっている。共に生活する中で「兄弟一緒」ということは多い。自分と同じくらいの年齢でしかも同じ親をもつ「兄弟」というのは「一番身近な自分とは別の人」なのであ

る。自分と比べて共通点を見つけたり相違点を見つけたりしながら，「自分」と「他人」の区別を認識していくのではないだろうか。

3月

《先生の耳元で，

N男「あのね，僕ね，お母さんが運転している時，いっつもちょうきん（緊張）しているんだよ。」（お母さんは免許取り立て）》

「緊張する」という難しい言葉を使うようになったN男。「ドキドキする」という言い回しは分かりやすいので，幼稚園でも使う。お母さんが運転した後で，「緊張した！」とでも言ったのだろうか。大人が普段使っている言葉を子どもはいつの間にか獲得してしまう。人の動作や表情や状態とその時その人が話した言葉とを関連づけ，自分の感覚で捉えることができる能力を，すごい！と感心する。母親が自分の子どもの言葉を聞いていて，自分の口癖に気づいたという人もいる。ある人は，子どもが立ち上がる時「どっこいしょ」と言うのを聞いて，恥ずかしかったという。

4歳児の「つぶやき」の考察

自己主張の多い3歳の時期から他人と協調できるようになる5歳までの間に，4歳という期間がある。何をしてもかわいい3歳児，力の限りを表現できる5歳児。一その間の4歳児って何が特徴かしら？と他の先生方と話すことがあった。「過渡期」と言ってしまえばそれまでだが，実は4歳児は甘えながらも自立の方向に向かう「不安定な時期」なのである。保育者の考え方や援助の仕方で，その後のその子の成長発達に影響を及ぼす大切な時期である。4歳児は，保育者との信頼関係を一層確かなものにしながら，徐々に友だちを求め，集団の仲間入りをし，社会に目覚め始める時期なのである。

「つぶやき」の事例を見ると，自然や行事との関わりが多くなっている。また，人と関わる中での「つぶやき」が多くなっている。これは，自分の感覚，自分の感情の赴くままに自分流の形式で自由にしゃべっていた3歳の頃の言葉から，他人と共有でき，他人と分かりあえる言葉を多く使えるようになってきたためであろう。

4歳の時をしっかり歩むと，5歳になってから大きな力を発揮するようになる。

■5歳児の「つぶやき」

4月

《K男「どうして雨降ったかって言うとね，お母さんが畑の野菜と一緒に雨降れ！ってお願いしすぎたんだよ。こんなに降ったら，傘に穴があいちゃうね。」》

連日雨の降らない日が続いた。久しぶりの雨降りにホッとする。K男の母親は毎日待ち望んでいたから，今朝はさぞかし喜んでいたことだろう。

K男の家には畑はない。少し離れた所に土地を借りてキュウリやトマトなどを作るという。食卓に出される野菜が少しでも自分の見ている中で育てられ収穫された物であってほしいし，できることなら子どもも栽培に携わってほしいものだ。今の時代，それもぜいたくで貴重な経験になってしまっている。

5月

《A男「先生！　T男君のアサガオ，芽が出たよ。チョウチョみたいに可愛いよ。」》

連休明け，アサガオの種蒔きをした。6月に入る頃，二十日大根の種を蒔く。種蒔きをした経験のある子もいるが，ほとんどの子はない。やはり自分で蒔いたものは，それだけ愛着も湧き，大切にする気持ち，育てる気持ちが生まれる。種蒔きの時，種の小さいことに子どもたちは気づく。気をつけていないと，掌（てのひら）から落としてベソをかきながら又もらいに来ることになる。種を大事そうに蒔き，「きれいな花が咲きますように」「大きくなりますように」とお願いする。水

をやることを教える。

やがてアサガオの芽はトンネルのように出てきて，双葉になる。先のA男の言葉は，それを見つけた時のものである。その言葉に他の子も刺激されて見に行く。そして，自分のアサガオの成長に強い関心をもち始める。一人の発見がクラスの他の子どもたちに広がり，皆で驚き感動する。集団の良さを感じるのはこういう時である。

種蒔きをきっかけに，私は，『そらいろのたね』（なかがわりえこ・文）という絵本を読み聞かせる。家が咲き，どんどん大きくなっていく話で面白い。

飼育・栽培は「生命（いのち）」に関する学習をする大切な場である。ウサギの赤ちゃんを見た時，アサガオが咲いた時，大きなサツマイモを収穫した時など，驚き感動する場面はたくさんある。自分で愛着を感じて育ててこそ，感動は残る。

抽象的な言い方になるが，子どもたちに「皆の心の中にも小さな種があるんだよ。大事に大事に育てると，大人になる頃素敵な花が咲くよ」と話して聞かせる。ある時には「皆もお母さんのおなかの中にいる時は小さかったんだよ」と話すこともある。大きくなったら忘れられてしまうことかもしれないが，自分を愛してくれている人がいることを感じていてほしいものである。

6月

《母親「S子ちゃん，おうちの庭のバラが咲いたら，幼稚園に持って行ったらどう？」

S子「うん…。でも，あのバラ，幼稚園バスに乗るかな…。」》

お母さんはしばらく笑いが止まらなかったそうだ。S子は真面目に答えたので，なおさらおかしかったのだろう。木ごと幼稚園バスに乗せようと考えていたのだと想像すると，愉快である。

7月

《Y子「雨さんって，線書くのじょうずだね。まぁーっすぐ点々って。」》

思わず「そうだねぇ」と心から感心してしまう。字を書くことに興味をもったり，絵を描きながら勢いのよい線を描いたりできるようになったからこそ，このようなつぶやきが出てくるのだろう。窓に当たる雨を見ていると，いろいろな模様を描いてくれて楽しい。子どもとの話題も尽きない。

8月

《母親「E子ちゃん，キュウリ食べると美人なお姉さんになるんだって。」

E子「お父さんもキュウリ食べなさい。美人な男になるよ。」》

お父さんは苦笑してしまったことだろう。そして，E子の語り口は母親にそっくりだったに違いない。ままごと遊びをしていると，その子の家庭の様子が想像されることがよくある。「お姉ちゃん，学校に遅れるわよ。早く起きなさい」などというお母さん役の子。ビールを片手に新聞を見るお父さん役の子。バブバブ言いながらはいはいしている赤ちゃん役の子。しかし赤ちゃん役の子は「今，赤ちゃんはおなかがすいて泣いているとこね」と解説しないと相手にされなくなることもあり，役になりながらも場面設定を考えながらナレーションを入れる。お母さんが我が子のごっこ遊びを見たら，ドキッとするのではないだろうか。幼稚園ごっこも同じである。特に叱っている先生役の姿を見ると，赤面してしまう。さらには，特定の子を名指しで叱っている様子には参ってしまう。

9月

《M男「明日の運動会がんばるね。おうちから行進しながらくるね。今日は暑いね。お日さま2つあるのかな。」》

運動会の楽しさを知っている子どものつぶやきである。張り切っている様子が伺える。また，運動会前日の暑さを，面白い表現で知らせている。9月中旬は確かにまだ暑い時期である。

運動会だからということで暑い時期に，リレー

だ，行進だ，リズムだ，体操だ，ゲームだ，はてはマーチングだと，あれこれやり過ぎると嫌になりやすい。また，保育者の心構えや指導計画，実際の指導方法によっても子どものやる気は変わってくる。

時々，幼稚園の運動会の在り方について問われることがある。種目数，競技内容，日程の他に，親からよく言われることは，練習で子どもに負担がかかり過ぎていないか，できないことを強要しているのではないか等である。

しかし，実際に本番の運動会を見ると，よくやったなと親として満足し納得して済んでしまう。確かに親や保育者に認められることで子どもは満足し，大きな成長の跡を見せてくれるので，「良かったね」で終わりがちになる。そして次の年の運動会が近づいてくると，又同じように練習がはじまり，同じようなことが繰り返されていく…。

本当にこれでいいのか。3年も（3年とは限らないが）保育者を経験すると，毎年同じような過ちを繰り返していることに気づくようになる。運動会とはいったい何なのか，運動会を通して子どもたちに何を経験させたいのか，何を育てたいのか。これらの根本問題について基本的な考え方がしっかりしていないと，見せかけのためだけの運動会に向けて苦しい練習が始まってしまう。

運動会終了後の反省会で，これらの点について重点的に話し合うことが肝心である。むしろそのことの方が，出来栄えや運営の反省よりもずっと大切である。

運動会とは「発達段階に応じた〈運動〉という表現方法で自分の力を発揮する場だ」と考えれば，おのずから取り組み方も変わってくるはずである。運動会は，子どもたちの毎日の生活・遊びと結び付いている運動を身体表現というかたちで競い合う場だということを忘れてはいけない。1～3年のプランで保育を組み立てて，その中に運動会を位置付けてこそ，運動会は意味をもつ。子どもたちが楽しみに待ち望むような運動会にしたいものだ。

10月

《ビニール袋に空気を入れながら，

M男「台風19号，この中にたくさん入ったよ。…ほら，風なくなったでしょ。」》

台風のニュースが連日テレビを賑わしている。実際に風や雨の強さを感じて，このような言葉が聞かれるようになるのだろう。自然現象や社会現象にも目を向け関心がもてるようになる5歳児。その関心を遊びの中でひょいっと口に出せるのだからすごいと思う。

11月

《A子「先生，クイズだよ。帽子をかぶったノッポさんを見つけたよ。これ，なーんだ？　答えは，ドングリでーす。」》

3歳になる頃から「なぜ」「どうして」と質問を浴びせる子ども。逆に大人からの簡単ななぞなぞ・クイズも喜ぶ。クイズの楽しさを覚えると，答えるだけでなく自らも出題者の側に回る。答えを連想させるようないろいろな言葉で言い表すのは大変なことだと思う。しかも，自分だけが分かるのではなきく，他者にも伝わらなければ面白くない。5歳でその機能を使って遊べるようになるなんて，なんてすごいことか。　月1回開かれるお誕生日会などの機会にレクリエーションとしてクイズを出してやることが多い。3歳の頃「赤くて，おいしいもの，なぁーに？」と問えば，春頃は「イチゴ」と答え，夏になると「トマト」という子もいるし，秋には「リンゴ」と言う子が多い。5歳になると，季節を問わず「リンゴ」という答えが先ず出てくる。長野という地域性だからだろうか。「イチゴ」や「トマト」と答えさせるには，「つぶつぶが付いている」「緑の帽子をかぶっている」など，もう一つ二つヒントがないと答えられない。それは，それだけ「赤い食べ物」という共通項の中身を具体的に幾つか考えることができる

ようになっている，そしてさらにそれらの相違点をも区別して認識できるようになっている，という証拠だろう。

4歳の時，しりとりで「ルーレット」「竿」などという知らない子もいそうな言葉が出てきた時にも驚いたが，A子は自分の言葉でクイズを作れるようになったのだなあと，この時感激した。さらに，「言葉」というものが共通のイメージを持つことのできる手段として役立っていることも，改めてこの時感じたのである。

12月

《O子「うちのお父さん，今日帰って来ないって。」

先生「えっ？　それは寂しいね。…どうして？」

O子「お酒で酔っぱらっちゃうからなんだよ。」》

O子の寂しそうな様子にちょっと考え過ぎてしまった私。O子の最後の言葉を聞いて安心して，ついでに笑ってしまった。忘年会のシーズン真っ盛りのこの頃。子どもには分からない大人の世界をどんなふうに感じているのだろう。

1月

《仲良しの友だちが厚着しているのを見て，

S子「A子ちゃんてば，小錦みたいだよ。鏡見てごらん。」》

S子の鋭い感覚。A子の厚着姿が引き出した言葉であるが，ちょうどこの頃，相撲界では小錦に敵なしで賑わっていた。その体格の良さといい，愛嬌のあるキャラクターといい，印象に残りやすい。もう既に大人と同じようにマスメディアの情報をちゃんと受け止めている子どもである。

2月

《K男「ねえ，こっちの目とこっちの目の間にお肉があって離れているのに，見るものはどうして1つに見えるの？」》

素晴らしい発見である。右目だけで見ても左目だけで見ても一つ。両目で見ても一つというのは確かにヘンである。片目ではうまく歩けなかったり物がつかめなかったりして不便であることを幾つかやらせてみたが，あまり納得していないかもしれない。良いことに気づいたことを認め，他の動物も皆二つの目を持っているのかな？などと考えさせてみた。このような科学的な，不思議に思う心を大切にしてやりたいものだ。

3月

《T子「毎日は毎日来るけど，毎日，違う毎日なんだよね。」》

どこから，このような言葉が出てくるのだろうか。「毎日」という言葉と実際の「毎日」。抽象的な言葉であるが，小学校へ上がる頃になるともう既にたくさんの抽象的な言葉を理解している。「心」「夢」「時間」「正解」「真剣」「成功」「失敗」「譲る」「だます」「唱える」など・など。

T子にとって，毎日は違う毎日らしい。大人にとって「毎日」とは何だろう。毎日同じ毎日ではなかろうか。毎日違って，毎日夢や希望に溢れていて，毎日を楽しんでいる子どもたち。大人にとっても「時間」は子どもと同じだけ平等にある。大人も毎日を違う毎日と感じられる豊かな感性の日々でありたい。

5歳児の「つぶやき」についての考察

自然に対する素直な驚き，社会の情報の取り込み，科学に向ける関心などが，「つぶやき」の中からも分かる。大人が見過ごしている，あるいは分かったつもりになっている日常の中で，子どもは非常に鋭い感覚と目を持って，知らないことを知ろうとする知的好奇心で迫って来る。

大人の庇護から飛び出して，自立した一人の人間になろうとする姿が，5歳児のここに見られる。

Ⅲ．3～5歳児の「つぶやき」の全体的考察

子どもの「つぶやき」を通して，その子が見え

てきたり，家庭が見えてきたりする。時には保育者自身の姿が見えてきたり，社会を映し出したりもする。子どもの「つぶやき」から学ぶことは多い。たった一言に感心させられ，驚かされ，考えさせられてしまう。

今回整理した「つぶやき」の記録から，3歳では自分なりの言葉で自分を表現しようとしていることが分かるし，その後の4，5歳児でも五感を通して四季・自然・社会・人間関係などの環境に働きかけ，体験をくぐり抜ける中から，確かな感触として実感できるものがあったからこそ，素晴らしい言葉が生まれてきたことが分かる。「つぶやき」の記録を積み重ねることによって，子どもの育ちの様子も見えてくる。

言葉はコミュニケーションの手段としての機能と認識の道具としての機能を持っている。幼児期における言葉の獲得は，人間が人間らしく成長発達するために欠かすことのできない大切な活動であることを，今回再確認することができた思いがする。

最後に一言。蛇足かもしれないが，子どもの言葉を追うことでその子のすべてが分かるわけではないということを付け加えておきたい。言語表現活動は消極的で平凡であっても，その時々の感情やそれに伴う表情も大切な表現方法なのだ。言葉にはならない感覚も大事だと思っている。極端な場合，ほとんど言葉を発しない子もいる。だからといってその子が豊かな感覚や感情が乏しいかといえば，決してそうとは言い切れない。縄跳びをしている姿が生き生きしていたり，飽きもせずにじっと虫を見ている子だっている。感情が豊かですぐに泣き出す子もいる。言語表現以外にも多様な表現方法はいくらでもあるし，子どもの場合にはむしろ言葉以外の表現手段に訴えるケースの方がはるかに多いかもしれない。だから，これまで見てきたように，子どもたちは言葉でこれだけ素晴らしい自己表現ができるとしても，言語表現活動が比較的苦手な子どもが秘めているそれ以外の表現の可能性を見落とさないように留意したいと思う。

［以下，理論的考察は（下）として次号に続く］

参考文献

（本号に関連する文献に限定）

1）岡本夏木『子どもとことば』岩波新書，1982年
2）波多野完治・滝沢武久『子どものものの考え方』岩波新書，1963年
3）藤永保『創造性教育――豊かな幼児教育のために』有斐閣，1972年
4）近藤薫樹『新版・集団保育とこころの発達』新日本新書，1978年
5）宍戸洋子・勅使千鶴『子どもたちの四季――育ちあう三年間の保育』ひとなる書房，1990年
6）（社）長野県私立幼稚園協会編『おさなご』1993年6月号（教育企画センター），32-39ページ，「幼児と学力」。
7）同1994年11月号，26-35ページ，「幼児期のさんすう・こくご」。
8）小林洋文『幼児の発達と生活のリズム・幼児の発達と教育』長野市立更北公民館家庭教育学級運営委員会，1988年
9）長野県幼年教育の会編『長野県幼児の口頭詩集・ひなどり』第11集（1977年版）